

● 朝のこない夜はない ●



失敗しっぱいは成功せいこうのもと

原因げんいんを探さぐることが

大切たいせつです

山首 鈴木正修

失敗から成功へ

昨年、二人の日本の学者さんがノーベル賞を受賞されました。その一人、生理学・医学賞を受賞された北里大学特別栄誉教授の大村智先生は、エバーメクチンという物質を発見し、それを元に薬を作った延べ二億人もの人を失明から救ったと言われています。また、人間だけでなくこの薬は、動物を伝染病から救うのにも役立てられています。

大村先生が受賞後、多方面の取材を受け「少しでも世のため、人のためになることができないかと、ひたすらそれだけを心掛けてやってきた」と答えられていたのを聞いて、〃発明・発見というものには慈悲心からだな〃とつくづく思いました。

立派な方はやはり、慈悲の心が深いのです。前回IPS細胞の発見によってノ

ーベル生理学・医学賞を受賞された山中先生も「どうにかして難病の人を助けたいと願いつづけていた」と、大村先生と同様のことを言われていました。

さつこん 昨今、その山中先生の研究所に入りた
いという人が列をなしているそうです。

その人たちに対して山中先生は面接で「大丈夫ですか。ほとんどの実験は失敗ですよ。一割も成功しませんよ。それに耐えることができますか」と聞かれるそうです。そう言われ、おじ気づいて帰っ

てしまう人もいるそうです。研究者にとつて失敗は、避けて通れないというのが事実のようです。

かの天才発明家・エジソンも失敗の連続でした。何百回も失敗して、周りの人から「もうやめたらどうだ」と言われてもエジソンは「一回も失敗していない。駄目な方法がわかったから小さな成功だ」と言い、実験を続けたのです。そして、最後には必ず大成功をおさめたのです。

あきらめない

自動車メーカー「本田技研工業」の創業者・本田宗一郎さんは「私に失敗という言葉はない。挫折という言葉もない。なぜなら、成功するまで、上手くいくまでやめないからだ」と言われています。戦前、本田さんがトヨタ自動車の下請けをしていた時、五十個中、四十七個も不良品が出たことがあったそうです。その時は毎日明け方まで、機械にしがみついて良い製品を作ることに専念されて

いたそうですが、当時のことを「私が一生のうちで最も精根を尽くしたのはあの頃である。『ここで私が挫折したら、みんなが飢え死にする』と頑張った。しかし、仕事はさっぱり進展しなかった。月末の給料も払えないことがあった、絶命のピンチだった」と話しておられます。しかし、そんな時でも朝礼の時にミカン箱の上に立ち、社員に向けて「日本一になると思うな。世界一になるんだ」と言い続けていたそうです。そして逆境

を^の乗り越え、本^{ほん}当^{とう}に「世^せ界^{かい}のホンダ」とな^なったのです。

「トヨタ自^じ動^{どう}車^{しゃ}・中^{ちゅう}興^{こう}の祖^そ」と言^いわれて
いる石^{いし}田^だ退^{たい}三^{ざう}さん^が、勝^{かつ}海^{かい}舟^{しゅう}の有^{ゆう}名^{めい}な言^{こと}
葉^ば「わしは恐^{おそ}ろしい男^{おとこ}を二^ふ人^{たり}見^みた。一^{ひと}人^{ひとり}
は横^{よこ}井^い小^{しょう}楠^{なん}、一^{ひと}人^{ひとり}は西^{さい}郷^{こう}隆^{たか}盛^{もり}だ」を真^ま似^ね
て「わしはこの歳^{とし}ま^{まで}に恐^{おそ}ろしい男^{おとこ}を
二^ふ人^{たり}見^みた。無^む茶^{ちゃ}苦^く茶^{ちゃ}と言^いおうか、我^{われ}々^{われ}の
頭^{あたま}で^は計^{はか}りよ^うのな^い発^{はつ}明^{めい}家^かだ。そ^の
二^ふ人^{たり}と^は、一^{ひと}人^{ひとり}が豊^{とよ}田^だ佐^さ吉^{きち}、も^う一^{ひと}人^{ひとり}が
本^{ほん}田^だ宗^{そう}一^{いち}郎^{らう}で^ある」と言^いわ^れてい^ます。

本^{ほん}田^ださん^とと^もに働^{はたら}いた名^{めい}副^{ふく}社^{しゃ}長^{ちょう}の藤^{ふじ}
沢^{さわ}武^{たけ}夫^おさん^が「本^{ほん}田^だはあ^きら^めない男^{おとこ}だ
つた。遠^とい^ゆ夢^めをい^{つも}追^おい続^{つづ}けてい^た。
『今^{こん}期^きの売^う上^{あげ}はいくらだ^{った}』などとい
うよ^うなこ^とは言^いったこ^とがな^かった。
た^だ結^{けつ}論^{ろん}の出^でない夢^{ゆめ}のよ^うな話^{はなし}ばかりし
てい^た」と言^いわ^れてい^ます。
し^かし実^{じつ}は、本^{ほん}田^ださん^は緻^ち密^{みつ}な人^{ひと}だ^つ
たの^です。仲^{なか}の良^よか^つたソ^そニ^にの創^{そう}業^{ぎょう}者^{しゃ}
・井^い深^{ふか}大^{だい}さん^{との}対^{たい}談^{だん}で、本^{ほん}田^ださん^は次^{つぎ}
のよ^うに言^いわ^れてい^ます。

「ソニーでもうちでも失敗しつぱいしたことは大たい切せつにしているが、多くおほの人は、この失敗しつぱいを知しろうとしない。表面ひよめんに出た成功せいこうばかりを探さがしにいくわけだが、その成功せいこうの陰かげにはものすごい数かずの失敗しつぱいがあるんだ。失敗しつぱいを恐おそれてはいけない。『失敗しつぱいの内容ないようがどうであったか』ということが一番ばんのエッセンスなんだ」

失敗しつぱいに失敗しつぱいを重ねかさねても、最後さいごに成功せいこうするためには失敗しつぱいの中身なかみを検証けんしやうし続けることことが大事だいじだ」と言いわれているのです。

エジソンや本田ほんださんのようなとてつもないことはできませんが、失敗しつぱいをきちんと検証けんしやうすることは、我々われわれにも必要ひつようだと思おもいます。

心を落ちつける

将棋しょうぎの世界せかいの話はなしですが、一時期じきき、七大だいいちタイトルタイトルのほとんどを羽生善治はふよしはるさんと渡辺明わたべあきらさん、そして森内俊之もりうちとしゆきさんの三人にんで分け合あっていました。その中なかの一人ひとり、森内もりうちさんは長いあいだ低迷ていめいしていましたが、

ある閃きひらめきによって問題もんだいを克服こくふくされたのだ
そうです。

森内もりうちさんは小学校三年生しょうがっこう さんせいから将棋しやぎを始め、おじいさんもプロの棋士きしで実力じつりよくは群ぐんを抜き、同級生どうきゅうせいの羽生はぶさんに四年生の時ねんせい ときに勝かったこともあるそうです。

プロ棋士きしを目指す人ひとは奨励会しょうれいかいに入り、
二十六歳さいまでに四段だんにならないとプロに
はなれません、森内もりうちさんは六年生の時ねんせい とき、
奨励会しょうれいかいの試験しけんに合格ごうかくしました。羽生はぶさん
も同期どうきで合格ごうかくしています。

その羽生はぶさんは、十五歳さいで史上三人目しじゆ にんめ
の中学生プロになりましたが、森内もりうちさん
は昇段試験しょうだんしけんに何度も失敗しっぱいして、羽生はぶさん
に大きく水みずをあけられました。

奨励会しょうれいかいでは、プロと一般ばんの会員かいいんでは、
その立場たちばは天てんと地ちほどの差さがあります。
羽生はぶさんが先生せんせいなら、森内もりうちさんはお茶汲ちやく
みです。そうして羽生はぶさんから遅おくれるこ
と一年半ねんはん、森内もりうちさんはようやくプロにな
れましたが、それ以後いごも十年以上ねんいじゆ、まっ
たく芽めが出でませんでした。一方ほう、羽生はぶさ

んは、二十六歳の時に七大タイトルをすべて取りました。

森内さんの低迷の原因は、動揺しやすい性格にありました。非常に細やかな配りをされる方だそうですが、それが勝負事には災いしたようです。繊細過ぎたのです。ミスをするときパニックになってしまう、さらに次のミスを呼び、負けが負けを呼ぶという悪循環に陥っていました。そこで森内さんは、このままではいけないと自分の失敗の原因を探り、

パニックになるときの、心の動きを観察したので。そして、辿りついたのが最初。最初のミスはたいいていの場合たいいたことがない。その後、パニックになって打つ次の一手が悪いんだ。最初のミスをした後にパニックに陥らないよう間を取るようにしよう。でした。

ミスをしたとき気付いたら、トイレに行ったり、顔を洗に行ったり、目薬をさしたり、何とか間を取るようにしたのです。

やがて、たったそれだけのことで正し
い一手が打てるようになり、三十二歳の
時に丸山忠久名人を破り初タイトルを取
りました。その後、名人位を通算五期獲
得して、羽生さんより一年早く永世名人
となりました。

その森内さんは「何かに挑み、負けと
いう結果が出た時、ほとんどの人は、次
の勝ちに目を向けます。『次はもつと頑
張ろう』と。負け癖がついている時、こ
の方法は、必ず次の負けを呼びます。そ

の時、目を向けるべきものは次の勝ちで
はなく、今、目の前にある負けです。誰
でも負けから目を背けたくありませんが、
その負けを見つめることこそ、次の勝ち
への近道となるのです」と言われていま
す。

ある意味、失敗を忘れることも大事か
もしれませんが、何か失敗してしまった
時は冷静に「どうして失敗したのか」を
考えてみるのが、成功への近道である
ことは間違いないと思います。